

平谷こども発達クリニックにおけるディスレクシアの取り組み
～ 福井県特別支援教育センターとの連携 ～

企画者 : 山名 寿美子 (平谷こども発達クリニック)
司会者 : 山名 寿美子
話題提供者 : 平谷 美智夫 (平谷こども発達クリニック)
原 恵子 (上智大学)
竹内 正宏 (平谷こども発達クリニック)
為国 順次 (福井県特別支援教育センター)

【企画の趣旨】

LD は DSM-5 で限局性学習症 (Specific Learning Disorder:以下 SLD) として概念が拡大された。発達性ディスレクシア (Developmental Dyslexia:以下 DD) は SLD の中核的な疾患であり、診断基準が整備され疾患概念もかなり明確になった。2010 年に特異的発達障害: 診断・治療のための実践ガイドライン (稲垣他) が提唱されてから診断事例が急増している。当クリニックは 2001 年の開設以来 LD を重要なテーマとして診療・療育に力を注いできた。診断例は 2002 年の第 1 例以来 350 例を超え、その成果を本学会で連続した自主シンポジウム (2014:2015:2016:2017) で発表してきた。①DD は注意欠如多動症 (ADHD) や自閉症スペクトラム症 (ASD) と高い頻度で併存 ②知的水準がやや低い境界線級知能あるいは軽度知的障害にも DD 的な児童が存在 ③幼児期から療育を受け就学後に DD と診断される児童も少なくない ④DD、ASD、ADHD にみられる書字困難についての検討が必要 ⑤教育場面での合理的な配慮が徐々に浸透しつつあり医療と教育の連携が重要。今回は DD 事例の検討に加えて、DD の早期発見、クリニックでの DD 支援の一つとしての実施している学習支援室、クリニックが連携している福井県特別支援教育センターの実践について報告する。

『クリニックでの診断例のまとめと療育支援』

平谷 美智夫

【疫学】2017.3 までに DD と診断した 308 例についてまとめた。() は症例、ADDI:不注意優勢型、ADDC:混合型 ADHD。男/女:258/50。併存症①計算障害(50以上)②ADHD(218) (ADDI(83). ADDC(107). ADHD 疑い(30). ASD:166 (ADHD+ASD134 ASD 単独 32)。③DD 単独(31)。IQ 分布:101≤(48)86~100(115). 71~85(109). 70≥(28) (IQ は低値であっても流暢性を大きくは下げないので DD 診断可と判断)、不明(8)。始語(m)18≤(57). 14~17(22). 14≤(136). 不明(93)。2 語文(m)30≤(45). 30>(179). 不明(84)。歩行開始(m)・在胎週数・生下時体重:特記すべき傾向なし。就学前に受診し就学後に DD 診断例(39)兄弟例(兄弟 2~3 名がクリニックで発達障害診断、少なくとも 1 名が DD 診断:対象は 2011.4~2015.3 診断例)。28 組 61 名:3 人兄弟 3 組. 4 人兄弟 1 組。男女比 42/19。同胞例の DD6 名。DD34 名。コンサータは 154 例に使用 119 例に有効。【支援】1)クリニックでの DD 支援 ①学校に診断書提出(合理的配慮実施要請)②併存症 (ADHD・ASD) への指導③ST による個別指導(支援器機指導含む)④ST による代替器機グループ指導 ⑤学習支援室(共同演者の竹内が報告)2)特別支援教育センターに介入依頼【考察】福井県では、当クリニックのみで少なくとも 350 例の DD 診断があり他の機関からの診断例も少なくない毎年申し送りされているはずなので、1000 名を優に超える教員が DD 診断児童を担当経験ありと推定。教員の中での DD 理解はかなり浸透し一定レベルの合理的な配慮がなされるようになってきた。

『発達性ディスレクシア（DD）の早期発見のためのツール開発』

原 恵子

【はじめに】DDは学童期に顕在化し発見が遅れると二次障害等で支援が困難になることが多い。早期発見、早期介入が望まれる。【目的】DDリスク児検出に有効な幼児期のチェックリスト作成。【方法】研究Ⅰ：保育園、幼稚園で日常生活での観察をもとに実施する20項目のチェックリストを作成し、健常児群と疾患群に実施。両群を判別しうる項目を選定した。研究Ⅱ：①健常児群と疾患群に、研究Ⅰで選定された項目についてチェックした。②健常児群に、個別検査（読みと音韻情報処理能力の課題）を実施。①②から選定項目の有効性を検討した。【結果】研究Ⅰ：健常児群と疾患群の判別に有効と思われる4項目が見いだされた。研究Ⅱ：健常児群で、チェック項目でマークされたもの（9.7%）には擬陽性を疑われるもの1.5%含まれていたが、早期発見・早期介入支援が有効と思われるもの8.2%が検出された。一方、チェック項目でマークされなかったが、DDの疑いがある者も見いだされた。【考察】選定項目は、DDリスク検出にある程度有効であるが、読みという複雑で高次の機能を、行動観察だけでチェックすることは困難である。精度を高めるためには、修正あるいは、補助的手段の活用などの工夫が必要である。疾患群の就学前から就学後の追跡データは、貴重な知見をもたらす可能性がある。

『ディスレクシア児童を対象とする学習支援室』

竹内 正宏

【学習支援室開催の経緯】当クリニックでは、平谷が前職の療育センター在職時より発達障害児童対象の学習塾を運営し、クリニック開業後も継続したが、専門スタッフによる作文教室・学研と協力した学習支援室などを経て、2017.6より主にDD児対象の学習支援室に体制を変えた。【目的】学習で成果が上がらず自尊感情が低下している児童が「できた」という成功体験を味わい、学校では友達ができなくてさみしい思いをしているが支援室で友達と楽しく過ごす場を作る。【コンセプト】「できるよこびふれあう楽しさ」【対象児童】2018.4までにのべ17名が参加 ①児童構成 低（小1～2年）、中（小3～4年）、高（小5～6年）各グループ4～6名②診断名：17名中DD16・書字障害1・併存症（ADHD12、ASD9）③男/女 16/1④学校における在籍状況：通常14（うち通級5）・特別支援学級3【スタッフ】元教員・心理士とST・特別支援教育専攻の学生【活動内容】17:00～18:30の90分間 アタマ元気学習・宿題・なかよし遊びの3つのパートで構成【結果】①参加人数の変化：12（2017.6開設時）→15（2018.3）→11（2018.4）②支援室をやめた理由：近くの適応教室1・スポーツを習う2・ST個別指導1 小学校卒業2【考察】本シンポでは、具体的な指導および見えてきた課題などについても報告したい。

『福井県特別支援教育センターにおけるDD支援の取り組みについて』

為国 順次

福井県特別支援教育センターでは12名の指導主事が年間1,370件（のべ約9,300回）の教育相談に応じている。学習面に関する相談は全体の約3割を占め、近年増加傾向を示している。当センターでは、今年度、DDについての理解・啓発のため、『読み書きに著しい困難さがある児童・生徒に対するアセスメント・指導・支援パッケージ』を刊行し、県内の学校に配付するとともに、webサイトでpdf版を公開した。パッケージでは、①小学校低学年、②小学校中・高学年、③中学校・高校、の各年齢段階で活用できるアセスメントや指導法、ICT教材の紹介、合理的配慮についての解説に加え、学校における実践事例も紹介した。シンポジウムでは、英語学習に著しい困難を示した中学1年生の教育相談ケース（後にクリニックにてDDと診断）を取り上げ、アセスメントの実施やケース会議を重ねる中で学校が合理的配慮の提供に至った経緯を紹介する。学校における合理的配慮の検討プロセスは、原則として本人・保護者からの要請を受けて開始されるが、当初の段階においては、①本人・保護者への丁寧な情報提供を行い、②配慮の効果を本人が確認できる試行のプロセスを経て、③本人に合う配慮を本格的に模索するプロセスが重要であることを述べたい。

キーワード：ディスレクシア・教育・医療連携